

「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」班の研究をまとめるにあたって

北原 糸子

はじめに

本報告書は、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化における非文字資料の体系化」の景観研究グループに属する「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」のこの5ヵ年の研究成果の一部をまとめたものである。ここでは、①三鬼清一郎「蔚山城合戦図をめぐる」、②大里浩秋・富井正憲「在華紡の居住環境について—上海の事例」、③中島三千男・津田良樹・富井正憲『『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因』、④津田良樹・中島三千男・堀内寛晃『『海外神社』跡地に関するデータベース』構築について』、⑤北原糸子「災害メディアと景観変容」、⑥王京『『関東大震災・地図と写真のデータベース』の作業手順』、⑦上田純広『『関東大震災・地図と写真のデータベース』の情報公開について』、⑧西田幸夫「関東大震災の火災被害と写真映像」、⑨王京「関東大震災と航空写真」の9編の論文を収録した。

これら9編の論文が追及する具体的なテーマは、16世紀末の秀吉政権の朝鮮侵略(①)、20世紀の植民地侵略に関わる租界研究(②)、海外神社跡地の研究(③、④)、及び20世紀最大の災害といわれる関東大震災の地図と写真のデータベース(⑤、⑥、⑦、⑧)とそれぞれ異なるものの、「景観」を非文字資料として位置付ける共通性を有している。

そのうちでも、最初の5編の論文はすべて植民地侵略・支配を通じてそれまでの景観が政治権力によって強制的に変容される問題を扱い、後半4編は人間が直接関与できない災害という自然の外力によってそれまでの景観が一変することに関わる問題を扱うものであり、より一般化していえば、戦争と災害による景観変容として捉えることも可能である。

時代的には16世紀末と20世紀の初頭に論考が集中し、この間研究対象に3世紀の空白が介在する。しかしながら、2003年COEプログラム発足以来の研究過程で、19世紀後半、すなわち江戸時代の災害について非文字資料としての錦絵版画に新解釈を施した研究成果を上げているから、研究対象に3世紀間の空白があるというわけではない。それにしても、時代と問題の幅が大きいこれらの諸研究を共通のキーワードで結ぶとすれば、どうなるであろうか。

そこで、植民地侵略・支配に伴う景観変容と災害による景観変容の問題に分け、各論を踏まえ非文字資料として「景観」というキーワードを設定したことがもたらした新たな研究領域の可能性と意義について簡単に述べて序に代えることにしたい。

第1部 景観に刻印された人間の諸活動の痕跡を辿る——倭城・租界

蔚山城合戦図の画像資料としての歴史的資料価値を論ずる三鬼は、①の本論を展開する前提として、倭城を以下のように捉える。16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮出兵は、前近代社会におけるほとんど唯一の対外侵略戦争であり、朝鮮半島南部の慶尚道・全羅道を中心に存在する倭城は、この侵略の過程で当該地域の景観に顧慮することなく建てられた日本式城郭であるとする。倭城には朝鮮における都市全体を城壁で囲む形態の邑城を改変したものもあるが、多くの場合はこれら既存の邑城は放火されたり、破却されたりしたという。ここで、三鬼は邑城と倭城は植民地侵略の結果がもたらす対極的な存在として位置づける。

この論点は、植民地侵略・支配を論じた②、③、④のいずれの論文にも当てはまるものである。

②の大里・富井論文は、20世紀初頭に中国侵略

の結果獲得した日本租界における紡績企業の工場建設とそこに働く日本人社員および中国人労働者の社宅の復元作業を行った事例研究である。本稿の主要な関心は建築学的分析による租界の空間形成史にあるが、復元された建造物、たとえば、「^{リーロン}里弄住宅」と呼ばれる上海における中国人労働者用の集合住宅は狭い路地を挟んで両側に建てられた棟割長屋であり、図面からはちょうど江戸時代の裏長屋を思わせるものがある。こうした反面、一方では日本人社員用の社宅は典型的なコロニアルスタイルが採用され、当時の日本では珍しかった椅子・テーブルの様式と畳の部屋の和洋折衷様式が採用されるなど、国家権力による圧力的な空間支配を行うことによってはじめて可能になった大規模集合住宅の建設であったことが確認される。では、そこに住む人々と居住環境の関係についてどうかというと、「一大村落を建設」することを目的としたが、実態は一大村落の中の施設が有機的に配置される構成とはほど遠く、工場周辺に孤立した村々が無関係に散在するものであったと指摘されるのである。ここで、わたしたちは、空間を構成する人間集団が紡ぎだすものとは無関係に展開される上からの支配の貫徹は成り立ちがたいものであったという反証を得る。

第2部 景観に刻印された人間の諸活動の痕跡を尋ねる

——海外神社跡地とそのデータベース化

以上の点は③、④の海外神社跡地の研究において、よりはっきりと打ち出された。

ここにいう海外神社跡地研究とは、戦前、日本帝国の勢力圏内に創建された1600余社の海外神社が敗戦とともに機能を停止したその後を跡付け、現在どのような形で存在するのかを調査・研究したものである。調査の基本方針は、海外神社の創建当時の姿を可能な限り復元し、その後の景観変容を追跡することで、海外神社跡地を含む景観変遷を非文字資

料の一環と位置づけようとしたものである。

調査の結果、海外神社の景観変容の要因、形態、時期などについて、③中島ほか論文は以下の4点をあげている。景観変容、すなわち破壊、破却、改変、改修、放置などについての多様な変容のあり方の第一には、当然のことながら、戦前日本の植民地支配後の政治体制に関わる政治的要因を挙げる。しかしながら、中国大陸の場合、戦争終結後ただちに破壊されたわけではなく文化大革命に至って神社の社殿の多くが破壊されるなど、景観変容の時期、変容のあり方が多様であることを第二の要因とする。第三には当該地の経済発展の度合いを指摘する。端的に言えば、跡地が開発され社殿などが消滅したケースなのか、あるいは放置され手付かずに残されているのかを左右する要因である。第四には文化的伝統に関わる問題である。たとえば、南洋諸島のキリスト教文化圏の場合には、教会や墓地に改変される事例などを挙げる。

しかしながら、これら景観変容を促す要因をあげながらも、人を神として祭り上げる神社が持つ宗教性は、日本、朝鮮、中国のそれぞれの文化に通底する要素があり、神社跡地の改変後も景観に付与された宗教性は払拭されずに残されていると観察する。

この事実は、大地、山、森、川、海など人間を取り巻く自然的環境と人との間には一時の政治体制を超えた不変の関係性があることを示唆するものではないだろうか。動かぬものが動く時、人はどのように感ずるのだろうか。まさに災害とはそうした衝撃を人々に与えるものであった。

第3部 景観に刻印された災害の痕跡を調べる

——関東大震災・地図と写真のデータベース化

後半の⑤北原論文は、まず、21世紀COEプログラム発足以来の災害メディアに関する研究経過を辿り、2007年「関東大震災・地図と写真のデータベ

ース」にいたる当該グループの研究成果を述べ、2007年度後半の完成を目指すデータベースに関する各論⑥、⑦、⑧、⑨を位置づける。

これまで災害メディアとして19世紀の錦絵版画から20世紀初頭の災害写真類の収集、調査、分析を行った結果、災害ごとに新しいメディアが創出され、流布される事実を明らかにした。2006年までの研究についてはすでに各年度の研究報告に発表済みであるからここで繰り返す必要はないが、2007年度は関東大震災に焦点を絞り、地図と写真のデータベースを作成することにした。

いくつかの地図と多種多様な写真を自在に重ね合わせるソフトを使用することで（⑥王論文、⑦上田論文）、わたしたちはいくつかの発見を得た。それらの発見の事実から、つぎのような成果を得ることができた。火災延焼図と延焼の事実を画像に留める写真類とを重ね合わせた⑧西田論文では、風向きの分析から延焼速度、避難者の動向などについての謎を解いており、⑨王論文では、地図に航空写真を重ねることで、関東大震災時の航空写真がこの大災害時に限って国民に共有されるものとされた歴史的意義を論及するところに到達した。

関東大震災での火災延焼の科学的解明は今日にいたってもすべてが解明されているわけではない。しかし、地図に写真を重ねることで、わたしたちは火

災の激しかった本所・深川地区では、火災のために写真を撮ることができず、火災の収まった後の被服廠の悲劇を伝える写真ばかりが多く残されたこと、建物焼失率100%の日本橋区・京橋区などの中心街では当時建築されたばかりの東京を代表するコンクリートのビルディングの残骸写真が多く流布された事実の裏側にある問題、すなわち、人々はトポスを何によって認識するのかという問題を災害による景観変容を通じて認識することができた。

災害景観という用語は妥当なものとは思えないが、災害によって様変わりした状況をメディアを介して伝えるためには、より衝撃度の強いものが選ばれ、特化されていく傾向は時代とともに強くなることは否定できない。実態としての災害とメディア化される災害像について、地図と多くの写真を重ねることで、写真の空白、また逆に過剰が意味することが自ずと明らかになるのである。

本報告の成果はCOEプログラムによる共同研究の過程で研究者自身が新しい課題を共同で追究する中で、新しい発見にいたり、その成果を共同研究の知見として披瀝するものである。こうした成果を共有できたことに対して、関係各位に感謝したい。

（きたはら・いとこ）